

中学生の帽子

福岡市東区 中園 正利

暑い夏の日だった。

私は弟の剛志を後に乗せて、せっせと自転車のペダルを踏んだ。それに、私のすぐ前を父の兄に当る初伯父さんの自転車も走っていた。

伯父さんの自転車の荷台には、白い布に包まれた『骨つぼ』がしっかりとひもで結わえ付けられていた。田舎道を伯父さんと私達は、身体中に汗をかきながら、一言もしゃべらず走ったのだ。

さて、その頃の私の家族は、私を長男とした男ばかりの四人兄弟で、大人は母だけだった。そして、父が太平洋戦争の舞台裏に運びこまれるように東京の巣鴨プリズンに拘留される時には、末っ子の弟は生れて半月も経っていなかったのも、家の小売店化と、ズボンの裾あげや上着のボタンづけなど母の内職を中心とした、とてもとても貧しい生活を始めたのだ。つまり私の家では、母だけが親として食べさせ、育ててくれた訳だった。

太平洋戦争が終わった翌々年、私が小学校3年生の、3月のある夕方、私の家にアメリカ人のMP 2人と日本人の刑事2人とがジープで突然やって来て、父を沖縄県八重山郡石垣島関係のC級戦犯容疑者として、連れて行ってしまったのだ。

父は偉い軍人ではなく、命令を受けるだけの水兵さんだったのに、昭和23年3月には横浜裁判で戦犯容疑者46名の内、41名が死刑の判決を受け、父も死刑判決を受けた1名だった。

「お宅のお父さんは、運がわるかったんだ」

と、年取った人は言う。

しかし、父と友達付き合いをしてくれていた西島さんは、

「駅や職場で署名をもらって嘆願書を出したら、父さんを帰してくれるだろう」

と教えてくれた。

そこで、母が書いた文書を土台にして、小学4年生になった私は2年生の弟と2人で、国鉄駅や百貨店や大型工場の入口を訪ね回った。父の死刑の判決を減刑してもらうために協力を願ひ、署名を多くの人から頂いて回ったのである。また、私は、進駐軍の最高司令官だというダグラス・マッカーサーにあてて、母と一緒に何度も何度も嘆願書を書いて送った。でも、なぜか返事は、いつも日本人のお坊さんからだけだった。

ところで、母がパンや飲み物の小売店と内職をしながら私達兄弟を養ってくれたが、貧しい生活だった。だから私は新聞配達を小学5年生から始め、朝と夕方とに、お正月の二日以外は休まずに回り、その賃金で母を手助けていたのだ。しかし、貧乏だった。

アメリカ人のMPに連れて行かれるとき、

「正利、頼むぞ。がんばってくれ」

と、父に言われたので、私は一所懸命母の手伝いをすることに決めていた。そして母は、「早くマーちゃんが中学生になれば、母さんも弟達も助かる」と、口癖のように言って、自分の気持ちを慰めていた。

そんな私も、4月にはいよいよ中学生だ。

私が通学することになっている公立の第四中学は、耳の上の所に白線がX型に交差した格好のいい制帽を大事にしているのだった。その頃衣類その物が全国的に足らず、中学校別に『制帽』として決めることもできなかったので、私は制帽だけが欲しくてたまらなかつたのだ。

私は、父が大工をして稼いでいたお金の、ほんの一部に相当する金額をどうにか稼いで母に渡すに過ぎなかつた。それに、母の財布の中にはいつも小銭しか入っていなかつたし、時には財布の中が全くのからっぽになることさえあつた。だから母に「帽子を買って欲しい」とは、とても言えなかつた訳だ。

そこで私は、父の水兵帽にひさしと白線を取り付けて、中学校へ行くつもりだった。わたしにとって白線の入った制帽は、母のいつもの口癖「マーちゃんさえ中学生になれば助かる」が事実になる『証し』だった。

ところで、中学入学が間近に迫つたある日、私は新聞配達を終わって、いつもの通り小学校の運動場を横切つて家に急いだ。

もう、腹ぺこだった。

私が裏門の所にくると、向こうから母と自転車を押した恵美姉さんの姿が薄暗がりの中に見えた。小さい弟を家に置いて母が外に出ることは滅多にないので、「どうしたんだろう」と、私は一瞬心配になった。

「マーちゃん、恵美姉さんが中学校の制帽を買つて、持って来てくれたとヨー」

と、母が涙の混じつた声で言つた。恵美姉さんが黙つて自転車の荷台から、白い紙の袋を私に手渡した。

開けてみた。

私が夢にまでみた、そして白線があごひもの上の方でX方に交差した制帽だった。

「いよいよマーちゃんは、中学生だ」

私と母の夢——制帽が目の前にあつた。

初伯父さんが、

「マーちゃんに骨を埋めてもらつて、恵美も喜んどるばい」

と、自転車を走らせながら呟いた。伯父さんの自転車の荷台には、もう恵美姉さんの『骨つぼ』はなかつた。伯父さんと私と弟の剛志の3人で、今、お墓に収めて来たばかりだった。

私の頭の上には、恵美姉さんから買つてもらつた、まだ白線が目立つ制帽が乗つかつていた。そして、「恵美姉さんは、どうして俺の制帽のことを分かつていたんだろう。そうだ、父が家

と一緒にいないので、『帽子を被って、弟たちのためにがんばって欲しいヨ』と言う気持ちが姉さんにもきっとあったんだな」と、私は考えながら自転車を走らせていた。

伯父さんと恵美姉さんとで私の家庭を元気づけ、私達に野菜や果物の裏庭での育て方、それから『うさぎと鶏』等の動物の飼い方も教えてくれたのだった。

その恵美姉さんは、結核が原因で19才で亡くなった。私より5才年上だった。

一方、私が夜間高校を受験する直前、父は再審で10年に減刑された後、再々審で無罪となって7年振りに帰って来た。

私が中学校から家に帰りついたら、父は巣鴨プリズンの『P』の字を背中に印刷した作業服を着たまま、私を火ばちの傍で待っていてくれたのだ。父の姿は戦後の歴史を背負った巣鴨のように感じられたのだった。